

# 報道カメラの変遷



## フィルムからデジタルへ

読売新聞東京本社データベース部 岩佐 譲

\* \* \* \* \*

読売プリントメディア東京北工場（東京都北区堀船 4-2-1）では、読売新聞の編集・制作・印刷・販売に関する様々な資料を展示しています。このうち、カメラのコレクションは、取材で実際に使われた歴戦のツワモノ揃いです。読売新聞写真部で活躍された岩佐譲さんに、展示機材を中心に戦後の報道カメラの変遷について解説いただきました（展示資料室）。

\* \* \* \* \*

## 報道カメラの代名詞

1960年代まで、新聞社のカメラマンが愛用するカメラといえば、「スピグラ」の愛称で呼ばれた「スピードグラフィック」=写真=でした。1912年、米「グラフィックス」社が開発、60年に渡って販売されました。



アメリカでは軍用カメラとして採用されており、日本に普及したのは第二次大戦後。進駐軍の米兵たちが横流ししたり、帰国時に手放したりしたことが、きっかけと言われています。1950年代には新聞社への特別輸入枠で正式に購入できるようになりましたが、一式30万円と、当時としては大変高価なものでした。

元読売新聞写真部の松永<sup>みちぞう</sup>憲三さんは、1959年に入社して最初に渡されたカメラがスピグラでした。当時、スピグラを使って

いるのは新聞社のカメラマンくらい。持っているだけで、「あっ、新聞社のカメラマンだ」と言われるほどで、「報道カメラマンの身分証にもなっていた」そうです。

スピグラのシャッタースピードは1/1000 秒（フォーカルプレキシッター時）。スポーツなど動きの速い被写体も撮れるようになりました。それまでの報道カメラは、最高でも1/400 秒程度でした。フィルムは「シノゴ」と呼ばれる4×5インチ（10センチ×12.5センチ）。大きい分だけ、画質もきれいです。1960年代を迎えて、一眼レフカメラが主流となってからも、読売新聞では1971年まで航空撮影や大相撲の撮影に、スピグラを使っていました。

暗い場所や室内の撮影では、ストロボではなくフラッシュバルブと呼ばれる発光電球を使用していました。1度シャッターを押すたびに、電球を交換しなければならないため、続けて何カットも撮ることはできませんでした。

## ■■■■ 水中の鎧 ■■■■ ■■■■ ■■■■ ■■■■



カメラを水中でも使用できるようにしたケースは「ハウジング」と呼ばれています。1954年、世界で初めて発売されたハウジングが「ローライマリン」＝写真左＝です。独「ローライ」社が開発した、カメラを守る鎧よろいのような姿で、6×6センチのフィルム用二眼レフカメラ「ローライフレックス」＝写真右＝を中に入れて使用します。

1956年1月、栃木県日光市の「華厳の滝」で、潜水学術調査が行われました。読売新聞の企画によるもので、学者ら60名を超える調査団が、滝つぼの深さや形状、生物などを詳細に調べました。この時も、ローライマリンが水中撮影に活躍しました。それまで華厳の滝一帯では、こうした調査は一切行われたことがなかったそうです。

写真部潜水班でも活躍した松永さんによると、使用するローライフレックスの焦点距離は75ミリと画角が狭く、かなり水中の透明度が良くないと使えなかったそうです。

## 東京五輪



ニコンF⑥（モータードライブ、バッテリーパックを装着）とSP

### ◎ さらばスピグラ

1964年の東京オリンピックは、新聞社のカメラマンにとって、スピグラとの決別の時でした。というのも、35ミリフィルム用一眼レフカメラ「ニコンF」が1959年に登場してから、

国産のフィルムの性能も飛躍的に向上し、ISO感度は50、100から200にまで上がりました。スピグラ以外のカメラでも、速いシャッタースピードで撮影できるようになったのです。

また、望遠レンズ、モータードライブといった、スポーツ取材を



ニコンFに「オートニッコール・テレフォトズーム8.5-25cmf/4-4.5」を装着。ニコンのホームページによると「世界初の実用スチルカメラ用望遠ズーム」だという。

サポートする機材の開発も進みました。中でも、もっとも愛用されたのは、「ニコンF」と「ニコンSP」でした。Fはモータードライブで連写が出来るので、スポーツ撮影に使

われました。東京オリンピックでも 85 - 250 ミリズームレンズ、モータードライブとの組み合わせで、競技の撮影に使われました。ニコン・レンジファインダー（距離計連動式）カメラの最高級機である SP は、小型で携帯しやすかったので、日常的な撮影で使用されていました。どちらも世界中の報道カメラマンに愛された名機となりました。

### ◎ パノラマ

「パノン」=写真=はパノラマ撮影専用のカメラです。1952 年、日本の「パノンカメラ商工」が開発しました。シャッターを押すと、ぜんまい仕掛けでレンズが首を振り、フィルムを走査する方式で露光します。東京五輪の開会式では、日本選手団の入場行進の様子をパノンでも撮影しています。



### ◎ パイオニア

東京オリンピックを前に、読売新聞は初めて女性のカメラマンを 3 名採用しました。女性の選手村は男性立ち入り禁止だったため、女性カメラマンが必要だったからです。今でこそ女性カメラマンは珍しくありませんが、当時としては画期的でした。2015 年 6 月現在、読売新聞では、全国で 13 名の女性カメラマンが活躍中です。

### ◎ より早く

東京オリンピック報道のために開発されたのが「スピードマグニ」。ニコン F で、ポラロイドのフィルムを使えるようにしたユニークな装置です。株式会社「ミカミ」が開発しました。フィルム現像や焼付けをしなくて済むので、30 分以上も時間が節約できます。

五輪後もヘリコプターからの取材で活躍しました。ヘリからは、専用の写真電送機を使用して無線で本社に送信。写真電送にかかる時間は約 5 分でした。

その後、ニコンの他の一眼レフ用やキヤノン F-1 仕様=写真=が追加され、電子カメラが登場する 1985 年頃まで使用されました。



## 1 秒 64 コマ

「アイモ」は 1925 年、米「ベル&ハウエル」社が製作した 35 ミリフィルムの映画用カメラです。小型で頑丈なため、戦場取材をはじめニュース映画の撮影に世界的に活躍しました。ゼンマイ動力又は電動のモーターを搭載していて、ゼンマイ時はネジを巻いて作動させます。



1 秒に 4 コマから 64 コマの撮影が可能なることから、新聞社では、映画ではなくスチル撮影用に改造し、スポーツの

分解写真のために使用しました。特に大記録がかかった時など、1970 年代後半まで使用していました（写真は改造機）。

## 苦い夜

元読売新聞写真部長の平井実さんは、入社 10 年目の 1970 年 11 月 25 日、作家・三島由紀夫が立てこもる東京・市ヶ谷駐屯地の陸上自衛隊東部方面総監部に向かいました。

正門わきに車を停めて、庁舎に続く坂道を駆け上がりました。庁舎前広場に着いて見上げると、バルコニーで鉢巻き姿の三島が演説しています。時計を見ると、夕刊最終版の締め切りが迫っていました。演説する姿や、広場の自衛隊員らをニコン F で撮影し、そのフィルムを夕刊用に送るため、正門で待たせたオートバイまで持って行きました。

庁舎前に戻ると三島の姿がありません。警備が厳しく、三島の立てこもる総監室に近づけないでいた時、ライバル社のカメラマンたちが庁舎から出てきました。何かを撮ったという顔つきでしたが…

夕方、写真部デスクに帰社の連絡をすると、「ライバル社が割腹自殺の写真を撮った」との情報が入っていました。電話でデスクの怒鳴り声を聞きながら、涙が止めどなくあふれてきました。会社に戻らず、夜中までずっと駐屯地の周りを歩き回りました。

新聞社のカメラマンは誰でも、そんな忘れられない苦い経験があるものです。

## もっと早く

デジタルカメラが現れる前の 1984 年、読売新聞はキヤノンと協力して、「電子カメラ」の開発に取り組みました。電子カメラは現像の必要がなく、撮影してすぐに電話回

線を通じて写真を送ることができました。

読売新聞は、1984年のロサンゼルス・オリンピックで、米国のスーパースター、カール・ルイスが陸上 200メートルで金メダルを撮ったシーンを、夕刊一面に早版からカラーで掲載しました。朝日新聞も電子カメラを開発・使用していましたが白黒でした。当時、雑誌などでは「読売と朝日の電子カメラ戦争」などと呼ばれました。カラーで通した読売に軍配が上がったと書いてくれた記事もありましたが、当時の電子カメラは鮮明さに欠け、両者痛み分けというところでした。

しかし、やがてデジタルカメラへと進化していくステップとして、電子カメラの果たした役割は大きかったと言えるでしょう。

## 20 世紀の巨砲



1990年、ニコンから超望遠の巨大なズームレンズ「AIズームニッコール 1200-1700ミリ F/5.6-8P IF-ED」が発売されました。野球の撮影で、バックスクリーン横にあるセンターカメラマン席から、本塁上のドラマを狙うために開発されました。

130メートルも離れた位置から、バッターの表情さえ手に取るように見えます。名前も長いですが、最大長 888ミリ、直径 237ミリ、重さはなんと 16キロ。受注生産のため、1本 600万円もしました。

読売新聞では、巨人戦の取材で活躍しましたが、野球以外で使われることはほとんどなく、専用のキャリアが必要で、持ち運びも大変でした。生産は 30本ほどだったそうです。

2000年から取材に使う機材の主流が、フィルムカメラからデジタルカメラに替わり、画角の小さな APS-C サイズの画像素子のデジカメが増えたことから、このレンズは役目を終えました。

## デジカメ時代

電子カメラは、ご存じの通りデジタルカメラへと進化します。1998年の長野オリンピックはフィルムとデジカメを併用していました。夕刊の締め切りに近い時間で行われる競技はデジカメで、午後に行われたスピードスケートなどは、フィルムで撮影していました。デジカメの画質はフィルムにまだ及ばなかったため、できるだけフィルムを使用していました。日本が金メダルを獲得したスキーのジャンプ団体は、フィルムを使うカメラマンと、デジカメを使うカメラマンとに分かれて取材しました。

デジカメが主流になったのは、デジタル一眼レフ「ニコンD1」（1999年秋発売）が登場してからです。値段は65万円。有効画素数は2.6メガピクセルと、現在のデジカメに比べて劣るものの、新聞に掲載するには十分な画質でした。プロの現場に定着した最初のデジカメです。バッテリーが長持ちしなかったため、カメラマンたちは予備のバッテリーを何本も用意する必要がありました。



今では、デジカメはフィルムカメラをしのぐほど高画質、高機能になっています。特に進歩したのは高感度になったこととAF（オートフォーカス）性能です。

2002年に主流だったニコンD1やキャノンEOS1Dの感度はISO1600くらいが限界でした。2015年現在のニコンD4SやキャノンEOS1DXでは、ISO10000でも画質が大きく荒れることはありません。

また、AFカメラが増えた1990年代でも、プロカメラマンはマニュアルでピントを合わせていましたが、今ではどんな場面でもAFで撮影します。屋内や夜間に行われるスポーツでも、確実にピントが合い、より速いシャッタースピードを使えようになったのです。鮮明な写真を読者のみなさんに届けることが出来るようになりました。

画質は落ちますが、ISO24800で撮影も可能になり、暗くて肉眼では見えにくい被写体も写せるようになりました。デジタルカメラは年々進化し続けています。

(2015年10月1日)

\* \* \* \* \*



ニコンS2

「読売プリントメディア東京北工場」の展示資料室には、記事に登場したカメラ以外にも、珍しい写真機材を展示しています。

また、プロ野球で、巨人の王貞治選手が756号本塁打を達成した際、紙面制作に実際に使われた写真版など、鉛活字時代の資料や、大正天皇の即位を報じる読売新聞の実物なども展示されています。お気軽にお立ち寄りください。



- ㊦プリント写真の電送機
- ㊧グラフレックスに 500mm レンズを装着
- ㊨水平式引き伸ばし機



▽読売プリントメディア (<http://www.yomiuri-pm.co.jp/>)

▽東京北工場 (<http://www.yomiuri-pm.co.jp/map/tokyokita.html>)